

新山協ニュース

▲ 発行者 鈴木敏雄 ▲ 発行所 新潟県山岳協会
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男方 TEL 0258-32-0428

新潟県登山祭、7月25日の時期になりました。弥彦山松明登山も、昭和29年より続き、大平の地、高頭仁兵衛翁寿像前で行われる高頭祭は、越後の生んだ山岳会の大先達、高頭翁の遺徳を偲ぶ大祭で、恒例の新潟県登山祭も併せ行われ、弥彦神社の燈籠神事に花を添えております。高頭翁による日本山岳会設立主旨書を、若干現代文に直して掲載します。

山岳会設立の主旨書

高頭 仁兵衛

凡そ山岳が、一国の地文及び人文に、影響することの大なるは、今俄に説くを要せず、これを歴史に考うるに、日本の文化は先ず近畿中国の山脈間に、印度の文明は、早く雪嶺山下に発達し、支那の美術は、北嶺山脈の秦嶺間にギリシヤの芸術は、ピンドス山脈の峽間に起り、イタリア、フランス、ベルマン諸邦は、皆アルプス山下に強を成しぬ。宗教を言えば、昔はモーゼ「シナイ」の高峰に立ちてエホバ神より無限を学び、キリストも又山上に終夜祈禱して、十二使徒に力を授けたりと伝えらる、釈尊の雪山に於ける、日本の名僧が到るところの山岳を、道場となせる、その例

立を見るに至り、氣風今や諸州に普遍して、壮佼は素より、老人婦人にまで及び、きょう導者は特定の教室にて養成せられ、道路は開拓せられ、精細なる地図紀分は出版せられ、その山岳研究の盛なるは、殆ど邦人意思の外にあり、彼等はかくの如く、山岳を対境として、氣品を高尙にし、意志を強固にし、身体を剛健にす、我邦人かながみて可ならんか、そもそも本邦の山岳は、高度いささかアルプスに及ばずといえども、自然の長城突つわい亡して、高く天半をたゆせる某々山脈の絶大観は決して彼に譲らざるのみならず、百般の変化はかえって彼に超えたりと称せらる、しかもうらむらくは、一般邦人、山岳の知識を欠き、地理書類中、我が山岳に関する記事は、往々これを外人の述作より、剪裁するものあるを見るを、かくの如きは、実に本邦学界の不備と言わざるべからず。それ高山に登るは、即ち天に近づくなり、空氣の密度、圧力、温度、平地と異なり、氣圈の色は、透明藍色を呈し、朝暉夕陰の美、雲霧風雨の豪壯を觀察するに、至便なるは言をまたず、動物、植物も、次第に下界の物と趣を殊にし、本邦中央の高山大岳にして、蝦夷千島産の物を見ること、すくなきにあらず、その他仰いで星辰を窺い、俯して地質を察する等、山に入らざれば、研究したたわざるもの、甚だ多し。空間をもつて言えば、天地を接するものは山なり、時間をもつて言えば、四季の循環を一日に経験し得るものは山なり、処間をもつて言えば、数百千里に亘れる水平線上の物を、直立体に分布して、兩三日に究め得らるるものは、又山なり、自然がはける色彩、自然を放てる光沢の純粹なるものは、最も川にしよう多にして、自然が意匠し、彫刻せる形体画線、又山をもつて最も変化万千となす、故に山角に立つは、絶対の一端に佇みて、絶対の秘奥を覗うが如し、人生何物の高快かこれにしかんや、おもんみるに、山は実に不朽の寿を有する理想的巨人なり、天火をもつて鑄られたる儀表的銅像なり、全国民の重鎮として立てられたる天然の柱石なり、これを諷い、これを究むるは、永世の大業にして、かつ何ぞ今日不急の

櫛形山脈 親睦登山報告

S 63・4・28 / 29

加治川山の会 下 條 莊 市

◎ 予想上回る大宴会

「オパンナリマスタ」第一陣、平田大六さん率いる関川村山の会の到着だ。眼鏡がキラリと光り、いつもの笑顔で入って来た。「オセド思ダドモ、早ガッタネス」下越弁がやけに似合う通称「せきのしよ」が一番乗りだ。

当日まで申し込みがあったのは15名、いったいどれくらい来てくれるのか、まったく分からぬまま本番を迎えた。

予想では30人は来てくれると思ってしたが、GW初日、各方面で山開きが催されていると聞き、内心は不安であった。しかしこの不安も陽が落ちるにつれ吹き飛んでいった。

楽しい仲間と美味しい酒、そして真心こもった手料理に、時計の針が今日は早く動いているのかと思うほどであった。

リタイヤした人から順に別部屋でボタンキュー、時計が次の日になった頃、宴はお開きとなった。今宵はここまでにいたしとうございます、だ。

事といわむ、本会ここに見るところあり、微力自ら測らずして、先ず欧州のThe Alpine Journalの例にならば、山岳専門の機関雑誌「山岳」を発売し、山岳に関する考察記事、一切を網羅し、山岳趣味と知識の啓発に任せんと欲す、しかれども本会の事業たる、単に雑誌発刊の事に止むべきにあらず、山中に登山者宿泊の小舎を立つるも可なるべく、登山新路を拓くも可なるべく、全国に亘りて山岳案内記を出版するも可なるべく、各登山者間に連絡を通ずる方法を講ずるも又可なるべし、なすべきを極めて多くして、いまだ一もその緒に就きたるはあらずこれを大成するは、一に趣味嗜好を同じゅうする、諸君子の援護に待つ他はあるべからず、けだしこれ美に国民的事業にして、決して少数人士のよく為し得るところにあざればなり、即ち本会成立の主旨を略記して、ひとえに大方の賛助を懇請するものなり。

明治38年 月 日

山 岳 会

これで我々もやったかいたったというものだ。

参加者持参の地酒に舌鼓を打ち、当会女性軍の手料理がもう来てくれている。飯を炊



登 頂 記 念

小休止の後一路櫛形山へ、途中、五頭山、二王子岳、飯豊が見える所があるが、参加者の一人が「ここからだ」と五頭山、二王子岳は側面から見えるのか」と言った。我々はこの山が正面だと思っていたが、住む所が変れば見方も変わるものである。箱岩峠への分岐を過ぎ少し行くと林道に合流し、全員嘩然とする。この山にこの林道（櫛形林道）は似合わない、と皆々口にするが、我々ではどうしようも

いたり、味噌汁を作ったりの奮闘ぶりだ。ますます頭が下がり拝むのみだ。朝、雑談のなかで「加治川村ではもう食用蛙がいるようですな」と誰かが言った。「いや、まだ時期には早いでしょ。」「では昨夜のゴーゴーという音はなんだったのだろう。」一同大笑。

コシヒカリの炊きたて朝食を食べ腹を強くし、バスで林道終点へ。大峰山へと向う。一本松眺望台は下草が刈り払われて見通しが良い。対岸の椽平の山桜もチラホラ咲き初めているようである。軽く休憩して大峰山展望台へ。途中電光型の登り道ではカタクリの群落があるはずだが今は見る影もない。心無い者に持ち去られた旨を説明すると一同がっかり。一汗かくとそこはもう大峰山展望台だ。今にも降りだしそうな空のため視界はあまりきかないが、昔の紫雲寺湯を思わせる景観には参加者一同感激してくれたようである。休憩すれば協会流のジョークが飛び出す。特に、長岡弁の室賀会長と下越弁の五十嵐さんとのかけあい面白く、時たま大爆笑となる。

ない。

大沢の詰めを巻くように行くのと、そろそろ紅山桜が見えてきた。薄紅色の山桜のため一際目立ち、そのあでやかさに声がる。法印瀑分岐手前で休んでいるとポツポツあたってきた。「さあ、急ぎましよう、もうすぐです。」とばかり、二日酔いの本調子でない体に喝を入れる。法印の峰を過ぎ、小ピークを越えると櫛形山が見えてきた。頂上はブナが芽吹いているらしく、薄緑色が鮮やかだ。トランシーバ交信では、支援隊は以前に到着し、豚汁の支度真最中とのこと。降り出した雨に追われるように、新緑の櫛形山へ。頂上は二王子岳、飯豊の展望台だ、雨は降りだしたがまだまだ視界はきく。この低山にてこの景色、これほどの展望とは誰も思っていなかったようである。雨を避けブナ林の中で昼食とする。支援隊が担ぎ上げた豚汁を食べる頃には、運良く雨も小休止。新緑のブナ林の下、思い思いに店を広げ昼食となる。豚汁は好評で、大鍋二つが空になった。

◎ 雨まで演出者、カタクリノ路

雨がまた降りだしてきたので長居は無用、頂上で全員の記念写真を撮り、足早に下山。下山ルートは法印の峰まで戻り法印瀑を見ながら下る、通称法印瀑コース。

分岐を過ぎ電光形に下り始めると、道の脇は一面カタクリの大群落。雨に濡れて一層際立って美しい。一面紫のじゅうたんを敷き詰めたような可憐なカタクリの花が、今を盛りと咲き競っている。全員登山道より少しも外れられない、それほどびっしり、しかもむらなく咲いている。頭上には紅山桜の老木が咲き、足下と頭上の花の共演だ。この山のこの景色、このコースにしてこの花、と一同驚嘆したようである。法印瀑、大瀑と過ぎ林道へ出る頃にはシトシト雨、雨具を着ての下山となった。共進加工前より迎えたバスに乗り宿舎七葉苑へ。支援隊はもう後片付けを済ませていた。

力してもらおう。又会うことと、とを約束して、全員帰路に櫛形山脈へまた登りに来た。いた。

白毛門から巻機山への縦走

長岡高専山岳部部長
岩 淵 和 有

我が長岡高専山岳部は、毎年ゴールデンウィークに春合宿と称して、谷川連峰周辺の山行を行ってきた。残雪を踏みしめながら、目に映る上越県境の雄大な景色は何回登ってもあきさせないものがあるからだ。今年、白毛門から朝日岳を経て巻機山に抜けるという縦走コースをとることにした。そんなにあまいコースではないということがは前々から聞いていたが、残雪期だから歩きやすいだろうという考えから相談の上決定したのである。

5月2日夜、我々5人(学生4人に顧問1人)のパーティーは、予定通り土合駅のホテルに降りた。あいにくこの日は、休日ではなかったのに授業が終了してからの出発となってしまった。本当は、5月3～5日の3連休を使うは

東面の岳壁がみえてくる。その迫力は、疲れさえも忘れさせてくれる。残雪を踏むようになりしばらく登ると、はっとまわりが開けスツンリとした白毛門が目の前に現れる。昨晩冷込んだせいか、最後の急登でアイゼンを着用する。出発して3時間半で白毛門頂上に着く。この登りは、今までの山行の中でも有数なものであった。ともかく、第一関門突破である。頂上での景観は、すばらしいもので、谷川連峰はもろろんのこと、360度一大パノラマであった。南方、赤城山から東に目を移せば至仏山・燧ヶ岳・平ヶ岳、北方には笠ヶ岳から朝日への



川村の品販売に全員心良く協

すべてお開きとなった。加治

が明らくなってくると、視界

稜線が、そして遠くには富士山が望める程である。今回の山行で一番のものだった。

白毛門から細長い尾根を下り、鞍部より雪面を一気に登ると笠ヶ岳の頂上に出る。ここで初めて遥か北方に巻機山

が青くかすんで見えた。ここから2/3のピークをまいて、約1時間で今回の縦走の最高峰・朝日岳に到着する。時計の針は11時をさす。昼飯をとるには、まだ早いということ

で、先へとすすむ。ジャンクシオンピークでは、雪がびっしりついているので歩きやすい。ジャンクシオンピークを右に行く。途中クマザサが露

出したところで昼食をとる。この頃から風が出てきて、雨が降りそうだ。左に今日の幕

営地・松倉山のなだらかな山頂が見える。やはり目的地が見えると元気が出るというもので、6時間近く歩き疲れ切った足どりもしっかりしてく

る。一気に2000m近く下り、地蔵の頭を越えると、大鳥帽子山である。残雪を踏みしめ

て緩やかな登り上りを繰り返すと、今日の目的地・松倉山に到着する。実働7時間半。なだらかな山頂は、一部雪が

消えていて大きな地塘がみえていた。風を避け、テントを設置し楽しい夕食を済ませると、明日の天気あまりよくないことを聞いて、早めに寝ることにした。

4日朝4時に起きると、空は明るく日の出が近い。予報と異なる天候に日頃の行いの良さがここにきたなと喜ぶ。好天気の中、朝食を済ませて6時に出発する。長い下りを

進めば、縦走路中の最低鞍部となる松倉乗越を通過し、そこから緩い登りが続き、やや急な雪面をキックステップで登りつめれば、柄沢山山頂が

目と鼻の先に見える。振り返るとジャンクシオンピークの奥に朝日岳、清水峠越しには谷川岳さらに万太郎・平標山への縦走路、その奥に苗場山の

独特な山容も眺められた。陽射しが強いので、照り返しが強烈である。柄沢山山頂を過ぎれば、目指す巻機山はあと

わずか。ここから緩い下りを過ぎ2/3のピークを過ぎれば、米子頭山である。この辺りからガスが出て、視界が悪くなる。ゆるい下りで風強い

を通過し徐々に高度を上げれば、ポツカリとした雪原に出る。都合のいいことに、ここら辺りでガスが晴れ、すぐ目の前に牛ヶ岳、そして巻機山の山頂がみえる。はるか南方

に目を向ければ谷川連峰の山々が見え、縦走したんだという充実感が湧いてきた。連休とあって巻機にはたくさんの人達が登っているのが見える。松倉山を出発して約6時間、巻機山頂上に立てば、丹後山

に向かう稜線から中ノ岳・八海山までのすばらしい眺めに会おう。これだから山登りというものはやめられない。

下山に入る。あとは下りだけだと思っていたところにニセ巻機への上りは億劫だったが、ニセ巻機から見えた雲海の上に浮かぶ柄沢山の勇姿に再び感動を覚える。長い縦走のフィナーレを飾るのにこれ

以上望めない自然の贈物だ。我々は尾根コースを下り、途中から雨に変わらずぶぬれになりながらも、無事清水部落到に到着した。春の残雪期には

絶好のものと見えるこのコース、今回事故も無く好天に恵まれ十二分に満喫することができた。

|| 絵ハガキ ||

越後あさひの自然

朝日山岳会がホームグラウンドにしている朝日連峰の記念写真をまとめ、10枚1セットの絵ハガキを発行しました。朝日連峰主稜、以東岳、相模山、朝日連峰の花、寒江山から以東岳、竜門山から西朝日岳、ブナ原生林、三面溪谷、鈴ヶ滝、高根溪谷と、その出来ばえは額に入れて飾っておきたくなる程素晴らしい。シン目を入れて、ハガキを差し出しても、説明文と小さい

写真が手元に残るよう工夫されている。1セット400円で頒布しております。希望者は左記へ申し込みください。

〒958-1002

岩船郡朝日村

大字高根472

遠藤実宛

☎0254-17310467

連絡

※ 北信越国体、7月22日/24日、笹神村五頭山塊で開催、県選手団の健闘を祈ります。

※ 全日本登山大会(詳細2号ご案内)参加希望者は、事務局まで至急連絡下さい。

※ 分担金未納団体若干あります。至急第四銀行長岡駅東支店、

普通1116600

※ 県スポーツ基金、10

5000円、県体育協会賛助会員1万円、協会賛助会員1万円募集

※ ニュース原稿、夏山紀行行事案内(2ヶ月位前)

等の投稿お願いします。

